

## ゲームによる本の紹介事例\_「犯人は踊る」

「犯人は踊る」は探偵が犯人を当てるか、犯人が逃げ切るかのゲームです。

図書館での「犯人捜しゲーム」の後に読みたい本と言えば、これです。

### ①『[図書館の殺人](#)』青崎 有吾／著 東京創元社 2016.1

閉館後の図書館で男子大学生が殺害される事件が発生。残されたダイニング・メッセージの謎に、高校生探偵が挑みます。入館パスワードを知り得る数人の司書が容疑者として浮上したり、凶器が分厚い本だったりするなど、タイトルどおり図書館ならではのミステリー小説です。

### ②『[のろわれた山荘](#)』P.マガー／原作、福島 正実／訳 国土社 1983.2

“探偵カードの所持者はだれか”という要素が「犯人は踊る」をスリリングにしていました。こちらの本は、「犯人捜し」ではなく、「探偵捜し」という実験的な試みを成功させたミステリーです。財産狙いの妻が夫を殺した夜、吹雪の中を4人の招かれざる客がやって来ます。殺意に気付いていた夫が探偵を呼んでいたらしいのですが、それは4人の中の誰なのか？というお話です。

### ③『[その情報、本当ですか?](#)』塚田 祐之／著 岩波書店 2018.2

「犯人は踊る」には情報操作カードやうわさカードがあり、探偵カードも犯人カードも所有者が目まぐるしく変わります。現実の世界でも、情報やニュースには間違いがあったり、意図的に操作されていたりするものです。この本では、情報の読み解き方、事実の読み取り方などを解説しています。

### ④『[こんなにも面白い探偵業の仕事](#)』金澤 秀則／著 中央経済社 2021.3

隠された情報を密かに集めるのが、実際の探偵です。「さまざまなトラブルに対して、解決のための情報を収集する仕事」と言えます。この本では、そんな探偵業の内容をはじめ、調査を依頼する時の注意事項などもわかりやすく紹介しています。なお、現実の探偵は地味で目立たず、どこにでもいる人のような格好をしているそうです。

### ⑤『[竹中英太郎 2 推理](#)』竹中 英太郎／[画]、末永 昭二／編 皓星社 2016.8

そんな現実の探偵とは異なる、幻想怪奇趣味の推理小説が流行ったのが大正時代の日本です。代表的な作家としては、江戸川乱歩、横溝正史らが挙げられます。彼らの作品に挿絵を描いたのが、福岡県出身の画家、竹中英太郎です。この本は、その挿絵を楽しめる探偵推理小説を6編収録しています。なお、第1巻は怪奇小説集で、同じく福岡県の作家、夢野久作とのコラボも楽しめます。